

## 中露軍事連携の

### 意味するところ



元空将 織田 邦男

#### 国会は議論せず？

最近、日本周辺で気になる軍事動向が目立つようになってきた。米国も非常に懸念している。一番の問題は、日本の政治、メディアとも無関心であり、当事者意識がないことである。軍事的無知からくる無関心なのか、意図的無視

なのかはわからない。いずれにしろ、同盟国である米国との脅威認識が大きくずれていくのは、健全なことではない。それは世界で第二位と第三位の軍事大国であるロシアと中国が緊密な軍事連携を始めたことである。

一昨年九月、ロシアはソ連崩壊後、最大規模の軍事演習

「ポストーク（東方）2018」を極東（中国国境付近）で実施した。総勢三十万人の兵士を動員し、中国も参加して合同演習を実施した。ロシア軍と中国軍は過去にも合同演習を行っている、だが、今回ほど大規模ではなかった。今回の合同演習は、両軍の密接な結びつきを示すものであり、アジア太平洋地域に大規模な軍隊を駐留させる米国も注目している。

この演習は、ロシアと中国両国との関係が悪化している米国に対するメッセージであることは確かである。だが、最も演習場に近い位置にある国は日本であり、日本への影響などを真剣に考えねばなら

ない。

ところが日本の国会では議論にもならなかったし、メディアもベタ記事扱いであり、この戦略的意味を深く掘り下げた記事はなかった。

昨年六月二十日、ロシア軍爆撃機（Tu95）二機が、日本海から対馬海峡を通過し、

台湾海峡を通過した後、台湾を周回し、バシー海峡を通過して太平洋を北上して帰投した。

この際、日本の領空を二回も侵犯している（図1）。

#### 露爆撃機

##### 台湾を初めて周回

ロシアの爆撃機が台湾を周回したのは、これが初めてである。ロシア軍機が台湾海峡を通過することも、台湾を一周することも、中国の事前了解をとらずロシアの一存で実施するとは考えられない。中国政府がロシアに何ら抗議を行っていないことから中露の綿密連携が伺える。

昨年一月、習近平主席は台

湾の武力統一も排除しないと述べた。今回のロシア軍機の行動は、台湾に対する中国の武力行使に対し、ロシアが加勢するまではいかないものの、是認することを暗示している。もしそうであれば中国の武力行使のハードルがかなり低くなる可能性がある。台湾海峡有事が勃発すれば、シーレーンが近くを通る日本にとっては、存立が脅かされる事態となる。

我が国は、今後の動向を含め、当事者意識をもって事態をしっかりと注視していく必要がある。

米国はインド太平洋軍司令官が、いち早く「懸念」を表明した。だが、日本ではニュ

図表 1



中露軍事連携に対する日本の無関心さとは対称的に、米国は極めて深刻に受け止めている。西太平洋から東アジア、インド洋に至る地域の平和と安定、秩序維持に責任を有する米インド太平洋軍司令官のフィリップ・デービッドソン大將は、次のように述べ

「中国への対応が我々の優先課題だが、ロシアについても注意を払っている」「米国と同盟国にとって一段と厳しい

領が国際会議で「重大な秘密の披露」とわざわざ断って、中国との軍事連携について公表した。  
ロシアが中国のミサイル攻撃早期警戒システム構築で支援するというもので、「このシステムを持っているのはロシアと米国だけだ」「中国も防衛能力を劇的に高めるだろう」とまで述べている。

「ロシア軍と中国軍は去年から今年にかけて、協調した活動を活発化している」「数週間前にはロシアの爆撃機2機が台湾を一周」しており、「ロシアが中国から了解を得て飛行した可能性が高い」「中ロが協調して世界の秩序に反対することは、我々の望む結果ではない」  
米太平洋空軍司令官のチャールズ・ブラウン大將も七月末、次のように述べている。「中露が協力、連携して活動を始め、懸念している」

米国の懸念とは対称的な日本の無関心さはどこから来るのだろうか。戦後、安全保障はワシントンに丸投げし、金儲けに専念してきたことによる当事者意識の希薄さも大きい。同時に中国とロシアは決して蜜月関係にはならない、いずれ仲違いするであろうとの思い込み、固定観念も大きいように思われる。

なるほど、中国とロシアが蜜月関係だったのは、歴史的に極めて短期間である。  
一九四九年、中華人民共和国が建国され、ソ連と国交樹立した。この時は蜜月関係だ

地図2



「桜を見る会」騒動に興じているだけだった。  
これに続く七月二十三日、

ロシア軍の爆撃機二機が日本海に進出してきた中国軍爆撃機二機と日本海洋上で空中集合し、四機編隊で対馬海峡を南下して東シナ海まで進出した。ロシアは翌日、「露中共同警戒監視活動を実施した」と公表している(地図2)。  
中露軍の爆撃機が編隊を組

んで、共同任務を遂行するのは歴史上初めてである。ロシアのセルゲイ・

シヨイグ国防相は「ロシアと中国の包括的な関係を発展させ、双方の軍の共同活動能力を高め、世界の戦略的安定を強化するために実施された」と述べている。  
同じ二十四日、中国は国防白書「新時代の中国国防」を公表し、「中ロ軍事協力強化」が高らかに謳われた。

この時、ロシアの早期警戒管制機(A50)が竹島上空を二度にわたって領空侵犯し、韓国軍が警告射撃を実施した。日本では竹島領空侵犯と韓国軍の警告射撃だけが大きく報じられたが、中露軍事連携を掘り下げて報道したメディアはなかった。  
十月三日にはプーチン大統

環境になるだろう」

### 中露の利害は一致

ったが、一九五六年にフルシチョフがスターリン批判をした途端、毛沢東が反発し、一挙に中ソ関係は緊迫化した。一九六九年にはダマンスキー島（珍宝島）で中ソ国境警備隊が武力衝突し、死傷者が多数発生し、敵対関係が続く。

一九九一年にソ連が崩壊した後、一九九六年に中露は「戦略的パートナーシップ」となり、二〇〇一年には「善隣友好協力条約」を結ぶ。二〇〇四年にはロシアが実効支配する国境地帯の島の一部を中国に譲渡し、二〇〇八年には引き渡し完了して中ソ国境が画定した。その後は蜜月とは言えないものの、敵対的關係でもなく、相互に不信感を

持ちながらも、善隣を装う関係が続いてきた。

中国の国内総生産（GDP）は今やロシアの七倍である。しかも国境をはさんでロシア側の人口が六百万人に対し、中国側は一億二千万人である。この現状は、ロシアにとって心配の種でないはずはない。

昨今の中露軍事連携は本物のだろうか。もし本物なら、我が国を取り巻く東アジアの安全保障環境は劇的に変化せざるを得ない。中露両国は双方ともに米国から経済制裁を受けており、対米関係上、戦略的利害は一致する。

ロシアは衰退しつつあるといっても、米国を破壊するの

に十分な核弾頭とミサイルを保有する国である。中国にとっても敵にしたくはない相手である。

現在、米中貿易戦争が進行中である。この本質は、「貿易」とどまらない。米国が主導する国際秩序、つまり「パックス・アメリカナ」を中国にとって都合のいい国際秩序、「パックス・シニカ」に書き換えようとする中国の挑戦に対する米国の抵抗である。つまり覇権戦争そのものなのだ。

新興国が旧来の秩序を自ら手で書き換えようとするのは歴史的必然である。従ってこの戦いは、今後長期間にわたって続くことが予想され

る。対米牽制上、利害が一致する中国とロシア。中国はロシアの軍事力を活用しようとし、ロシアは中国の経済力を利用しようとする。この際、長年の相互不信感は腹にしまっただけで協力するのは自然である。

### プーチンの目くらまし？

中露という独裁国家同士と、我が国は日本海と東シナ海の二正面作戦を強いられる。それだけではない。自由と民主主義、そして人道、人權、法の支配といった価値観を有する日米同盟と対立することになる。

今後「日米VS中露」という

対立の構図がより鮮明になり、地理的にも日本がその対立の最前線に立たされることになる。

また日本は中国、ロシア、韓国の三国と領土係争を抱えている。この三国が連携して日本の領有権を否定した場合、北方領土、竹島の違法占拠状態の固定化が進み、尖閣諸島も強奪されかねない。

昨年十二月、プーチン大統領は「中国との軍事同盟は存在せず、同盟を結ぶ計画もない」と述べ、相互防衛義務を伴うような関係に発展させる意思がないことを強調した。ある意味これはプーチン得意の「目くらまし」に近いのではないか。同盟は結ばない

が、軍事連携を強化すると言ったに等しい。経済面でも昨年十月には「ロシア主導の経済圏構想『ユーラシア経済連合』と中国主導の巨大経済圏構想『一带一路』の統合を進める」とまで述べている。

日本は中露軍事連携という現実、そして歴史的必然に真摯に向き合い、今後どう生き延びていくのか、平和と繁栄をどう確保していくのか、真剣な議論と戦略の構築が求められる。

中露軍事連携に無関心を装い、国際政治に背を向けたまま「桜を見る会」騒動といった枝葉末節に時間とエネルギーを費やす暇はないのである。